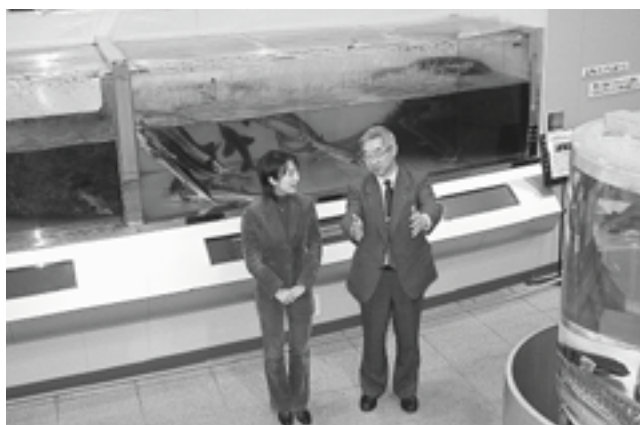


いま全道各地の河川では、川を活かした学習活動やまちづくり活動などさまざまな分野で、行政とも連携しながら多くの市民団体が活動しています。地域でこうした活動を実践している方々に、「川と人づくり、まちづくり」をテーマにお話していただき、これからの川づくりにつなげていきます。

川と人づくりの石狩川リバー インテリジェント認定制度



川の科学館内（チョウザメの水槽前）

上田 英二氏

まちづくり・川づくり協議会 理事・事務局長

インタビュー

真砂 徳子氏

フリーアナウンサー

まちづくり・川づくり協議会

真砂 上田さんのお生まれは滝川で、大学は東京、地元に戻られて事業を継いだということですね。生粋の滝川っ子である上田さんにとって、滝川という町はどんな所だと思いますか。

上田 大学で東京に行きましたが、東京は人が多過ぎて私らの住む所ではないと思いました。滝川に戻ってから仕事の関係でたまには東京に行きますが、くたびれて帰ってきます。だから今、東京の人たちが北海道や地方に対してぶつぶついつていますが、私からいえば、「こっちにおいで」という気持ちです。

真砂 一度北海道を離れて、改めて自分たちのふるさとのよさを実感するというお話を伺うことは多いですが、上田さんもそのような実感をお持ちなんですね。

上田 そうですね、もう東京には住めそうもないですね。

真砂 事業を通し、さまざまな方と触れ合う中でこうした地域の川をシンボルとした活動にも参加されるようになったのでしょうか。

「あんた、何でここにいるの」

上田 実は、私は川には全然縁がなかった。だから、どうしてこの協議会に入ったのかと言われると、はなはだ都合の悪い話で、誘われて「いいよ」と顔を出しました。周りのメンバーから、「あんた、何でここにいるの」と聞かれます。つまり、私はコンクリート会社の社長ですが、協議会のメンバーはほとんどがアウトドア派の人で、野鳥や野草、カヌーをしたり、「飛んでけ！車椅子の会」の人など、いろいろな人がいました。私は会社人間で狭い世界しか知らないので驚きました。

真砂 では、声をかけられたときは、正直、どのようなお気持ちで？

上田 断る必要もないし、「悪いところなら適当にやめればいい」といい加減な考えでいました。

真砂 今の上田さんのご様子からは想像が付きませんね。では、実際始められてどうですか。



上田 1年目の平成15年は国土交通省の「多様な主体の参加と連携による活力ある地域づくり」モデル事業をしました。この事業に合わせて「まちづくり・川づくり協議会」を6月19日に設立し、国土交通省の予算をいただいて活動し、報告書をまとめて終了しました。2年目はどうしようとなりましたが、いや、続けようという話になったのです。

三つの分科会

真砂 モデル事業にある「川を通じた、多様な主体の参加と連携によるまちづくり・川づくり」は、簡単に言うと、川をシンボルに地域を活性化させる取り組みですね。この事業によって、具体的に何をされたのですか。

上田 分科会を三つ作りました。一つは内水防災活動分科会です。石狩川本流の治水は、開発局でずいぶんやってくださったから、簡単には洪水が起きないですが、逆に石狩川に入る小河川から石狩川本流に水が行かなくなります。ですから排水機場をつくって小さな川の水を本流にポンプアップしないと内側が床下浸水します。私たちは、そこをよく分からずに慌てることになります。

もう一つは、私たちの活動のフィールド、ラウネ川の水質改善・自然環境保全分科会です。子供たちを遊ばせようとしたのですが、その前に水質、農家の農薬など環境問題があり、ゴミ捨てがひどいのです。釣りをするのはよいのですが、釣り針を捨てていくのは困りますね。どういうわけか、冷蔵庫なども流れてきます。

真砂 冷蔵庫ですか。

上田 不法投棄ですね。分科会の本当の目的は、ラウネ川で子供たちを遊ばせることです。年に1回ゴミ掃除をします。それだけではおもしろくないので、植樹して河畔林をつくっています。石狩川水系に遊べる憩いの場所ができるような自然や水質環境の改善・保全をしようとしています。

もう一つはまちづくり・川づくりサポートセンター設置活動分科会です。江別市にそのモデルとなる河川防災ステーションがあります。普段はいろいろな活動の拠点です。消防団にも属している会員が見学し、「いや、すばらしい、ぜひ、滝川

にも欲しい」ということになりました。ステーションには洪水時の救助の道具や俵などの資材を備蓄しています。俵に土を詰めて決壊しそうな堤防に積んで水害を防ぐわけです。

真砂 みんなで積むのですか。

上田 消防団はそう考えています。防災ステーションには俵に詰める土砂の小山が用意してあります。俵に詰めると土だけでは水がしみ出るので石と土と砂をうまく混合して山にしてあるのです。当然ですが、びっくりしました。

真砂 もしものときのために備えてですか。

上田 そうです。昭和56年に江別は洪水にあいましたが、その場所に用意してある。「ぜひ滝川にも」お願いしたいところです。

10年ほど前、私の親父がまだ元気だったころ、石狩川の治水に関わるシンポジウムで怒り出したことがありました。パネリストは川に植樹して、子供たちがもっと遊べる憩いの場所にと主張しました。親父は実際、洪水で家も会社も水につかる体験をしていましたが、治水が進んだそのころには大洪水を経験した人が少なくなっており、高水敷の木が水流を阻害して洪水の原因にもなることが理解されていないことに腹をたてたのですね。

真砂 洪水の恐怖や心配をせずにいられるのは、治水のおかげなんですよ。

上田 洪水体験がないのは幸せですが、逆にみんなが知らないと困る。油断すると洪水が起きることをどう広めるか、PRの知恵が必要ですね。

真砂 実際に活動を始められ、活動にかける思いや姿勢は変わりましたか。

上田 国土交通省のモデル事業のときは滝川市役所が事務局で、次の年は「協議会で、誰か事務局をやってくれませ



んか。」といっても、「はい」とは誰もいいません。私は泳げないし、カヌーもできずに「あなた、どうしてここにいるの」といわれた人ですから困りました。しかし、事務的に誰かが動かないと活動は続きません。「ではとりあえず1年間します」といったのです。

真砂 とりあえず入ったのに、1年後にまた、手を挙げるといのは、大きな心の変化ですね。

上田 私は会社人間だから、その目で見ると不思議な人たちがたくさんいます。私には面白かつ

た。誰も事務局をやらないと尻すぼみになるのはさびしいので引き受けました。

真砂 川に対する思いとか、まちに対する思いは、百人いれば百様でしょうね。

上田 真砂さんも仕事柄、いろんな人に会って分かると思うけれども、私たちは狭い世界で生きている。いくら年数がたっても、同じ世界だけしか知らなくて、「あら、まずい」という感じです。

石狩川リバーインテリジェント

真砂 いろいろな人がいろんなアイデアを出すことで、活動の可能性が広がりますよね。

それでは協議会が始められた石狩川リバーインテリジェント認定制度（IRI[※]）は、どのようなものか教えていただけますか。

上田 要はまちづくりに川をどう活かせるかを考えて実践しようとするものですが、現代人は川に対しての意識が希薄で、川との楽しい思い出が少ない。そこで、人を川と結びつけるリーダーシップ果たせるコーディネーターを養成するものです。やってみてよく分かりますが、子供たちの父母の年代はプールで泳ぎ、川には近寄っていないのです。

真砂 川で泳いだ経験がない。

上田 実は私も小学校1年のときに同級生が川で亡くなり、校長先生から「川に近づくのは禁止」という話が出ました。

真砂 「川が危ない」ということですね。

上田 そういうことになった。兄姉のいる同級生は、「おれは川で遊んだよ」と先生に内緒で連れていってもらえた。兄姉のいない子はそれっきり川の経験がない。だから、私は泳げない。私から下の年代はプールしか知らない。

真砂 泳ぐならプールに行けばいいことになったわけですね。

上田 親が子供のころに川の経験がないので、子供も親も川に近づけない。学校の先生方も同様に一定の年代以下は「みんな川に近寄ってはけません」と教育された方で、先生としては責任もあり、「川に行くのはやめましょう」という雰囲気強い。そこでまず、川を知ってもらわなければならない。危険なことは危険で、安全問題もきち

※ 石狩川リバーインテリジェント認定制度（IRI）：石狩川流域の住民が実践する川を活かしたまちづくりの活動を促進させ、活力と魅力ある地域づくりをすすめるため、その住民主体の活動をコーディネートする人材を育成する制度。



んと勉強し、川の楽しさも分かってほしい。それを偉そうに認定制度にして、「川の達人を広めよう」と始めました。

真砂 川の面白いところ、川の危険もすべて含めて知って、達人になってほしいという制度ですね。川を知することは、まちをよく知ることにもつながりますね。具体的にはどんなことを。

上田 まず、「ミントチ祭り」です。ミントチはアイヌ語で「カッパ」の意味で、カッパを中心に祭りをしています。それと先ほどのゴミ拾いと植樹をするプロジェクト。「子供水辺の楽校」は子供たちに川を体験させますが、先に親を引きずり込みます。国土交通省もそれに気がついて文科省と「こども水辺協議会」を全道で30ほどつくり、環境省も含めた共同プロジェクトになりました。カヌープロジェクトは、何年か前に親子と一緒にカヌーをつくり今は、カヌーを自分でつくりたい人をサポートする事業です。

真砂 自分で、大型のカヌーをつくることができ



ミントチ祭



ゴミ拾い



カヌー作り



カヌー川下り

るのですか。

上田 つくれます。興味ありますか。

真砂 カヌーは好きです。以前、番組の撮影で、カヌーに乗る機会があり、私はアウトドア派ではないので恐怖でしたが、やってみたらちっとも怖くない。水上からみえる風景は、地上のそれとは全く違いますよね。格別でした。

上田 違いますね。野鳥観察でカヌーから撮った写真を見てみんな感激します。

真砂 先日、鵜川で、自然観察からだんだん鳥に夢中になったというお話をうかがいました。鳥には不思議な魅力があるのですね。

上田 おかげで、朝の5時から鳥を見に行く人が増えました。それと昨年、一昨年と子供たちを連れて、川下りとカヌーづくりをしました。子供たちのアイデアでカヌーに名前をつけました。

真砂 親子でどのくらい集まるのですか。

上田 20人近く。どうしてもカヌーをつくりたいおじさんが、「親子でなきゃだめですか」と友達の子供を借りて親子のようにやっていました。

真砂 いいなあ。どのぐらいの期間でつくれますか。

上田 週1回で2カ月ぐらい。ニスを塗ったり、乾くのを待ったり。ちゃんと教えて面白ければみんな頑張ってます。できあがると進水式とカヌーの基本動作を練習します。ライフジャケット(PFD)を着て川に落ちこちても、顔が出て絶対沈まない。力を抜くと浮くことを体験させます。子供たちは一度川に飛び込むと「もう上がってこい」といっても「まーだ」とやっている。やっぱり川に浮かんで、「ああ、そうか」と分かれば、みんなすぐ納得しますね。

真砂 身体でちゃんと覚えるのですね。

上田 最初は帯広エールセンターの千葉よう子さんと太田昇先生に何遍も来ていただき手伝っていただきました。だから千葉さんに何かいわれると聞かないわけにはいきません

真砂 千葉さんは本当に身をもって川を知る実践

をしていますね。

上田 私はアウトドア派ではないですが、みんな元気でよくやります。本当に好きなんですね。

真砂 そのような様子をご覧になって、上田さんも元気をもらっているのではないですか。とても楽しそうですが。

上田 家内から「あなた、ここに入ってよかったよね」といわれております。

真砂 奥様がそうおっしゃるということは、本当に楽しんでいらっしゃるのですね。

ボランティアと官民協働

真砂 子供たちの特徴をとらえて活動につなげていく中で、今後、こんなことはどうだろうとか、課題みたいなものは感じていますか。

上田 私たちの団体は基本的にはボランティアでやっていますが、今、ボランティアをする時間的余裕がなくて、意欲を持つのが苦しくなっています。ボランティア組織をうまく動かすには、負荷をかけ過ぎずにタイミングをみないと、無理が出ます。でも、変に制限しても意欲を失いますからそれをそがないようにしています。

真砂 続けていくことが大事ですものね。無理をせず、できる範囲で楽しんでということをお心掛けていらっしゃるということですね。

上田 会社なら命令的な指示でいいですが、団体ではみんなの「やりたい」気持ちを優先して、事務局はあくまでもサポートする側です。実際に実践するのは会員ですからね。

真砂 これまでの活動を通し、行政とのパートナーシップや官民協働のあり方について、どのような考えをお持ちですか。

上田 官の立場が強いと、予算や立場もありますからどうしても制約になります。民間では少し緩やかにやれるので、私たちがやる方がいいと思います。役所を無視してではなく、役所側も理解してもらえる方向があると思います。

真砂 先ほどから自治体や国の各省の話をうかがっていると、川は自分たちの想像以上に貴重な

舞台だと世の中が気付いてきていると思えます。

一人ひとりが全員意見を持つ

上田 もっとすごいです。総会では会員を集めて新年度事業の話をします。「ご意見をどうぞ」といっても何も出ない。それで議長が、「みんな順番にひと言ずつ意見をいしましょう」とやったのです。すると全員が堂々と意見を述べる。タイミングと場をセッティングすれば、今の日本人はびっくりするぐらいたくさん意見を出します。

真砂 考えていて、行動しようとしてどこかで思って、そのきっかけを探しているのですね。

上田 ましてや私たちは好きなことをするために集まる協議会だから、その気持ちも、希望も、夢も、勇気もあり、意見がどんどん出ます。

真砂 それは感動するお話ですね。最初はちょっとした興味で始めた上田さんにとっても、この活動が、人生の大切なものになっているのではないかと感じました。

今後はこの活動を通して、どんなことを実現していきたいと思われますか。

川沿い市町村の防災連携を石狩川流域で

上田 石狩川流域は、上流から下流まですごくたくさん市の町村が関係しています。流域全部の人たちとできる協議会になれば素晴らしいですね。今はまだ滝川市域内です。市町村合併の話も出たり壊れたりしていますが、実際に滝川の上下流の町を行き来して、川でつながっているのに逃げられないし、行政区域の枠に縛られたくないですね。

真砂 尻別川でも流域の方たちがみんな同じ川の条例を持って連携する話でした。川べり・川の対岸にあるまちは、市町村合併ではなくて、川を通してつながることがすごく大事になってくるかもしれませんね。

上田 それは必ず出てくることです。滝川だけが防災で頑張ると、下流側が被害を受けやすくなる危険性があります。上流の層雲峡で大雨が降って、滝川に水が来るまでには、昔は蛇行で時間が掛かりましたが、今は流域の水路も整備され、下流の水嵩が増すスピードが速くなっています。それをよく理解しないとまずい面が出てきます。

真砂 それを知らないといけません。近ごろは異常気象といわれ、天災が急に起こる。治水の知恵を使って新しい解決策を見出すことも必要ですね。

上田 最近の集中豪雨では時間雨量の記録がどん

どん更新されています。100年に1回の洪水予測も、今は極端には毎年起きるようになった。地球温暖化のせいらしいですが、考え方を切り替えてスキルアップした考え方で取り組まないと難しくなってきましたね。

真砂 お役所に任せきりではなく、住んでいる私たちも何かなくてはと思いますね。

滝川の発祥

真砂 先ほど松浦武四郎の地図を見ましたが、あのころの蛇行した川を見ると行政区域とはまったく関係なく皆さんが生きていた時代を感じ、昔に思いをはせました。本流のショートカットでできたラウネ川は、岡崎文吉博士のころですか。

上田 そうですね。岡崎さんの顕彰碑があります。

真砂 ラウネ川は滝川のまちと川づくりの拠点ですね。

上田 滝川のまちの活性化にはいい財産です。つくろうと思ってつくれるものではないですから。

真砂 滝川は空知川と石狩川が合流し、航空公園やラウネ川のような場所、また人材的にも資源や財産がいっぱいありますね。

上田 昔からここは、大河川に挟まれた特別の場所でした。札幌から旭川へは、新十津川から来て石狩川を渡るか、岩見沢から来てここで空知川を渡らない限り旭川方面には行けません。そこで、ここに渡船場ができ、水嵩が多くて渡れないときに必要な旅館を開きました。それが滝川の最初です。その後、滝川村戸長役場がつくられ、この一帯の中心になり、滝川、砂川、赤平、芦別などに分かれたと聞いています。その意味ではもう少し、誇りにしてもいいのだと思います。

真砂 今日この川の科学館で川とまちづくり活動から石狩川の防災の歴史や滝川の原点までとてもいいお話をありがとうございました。

(本インタビューは、平成19年2月1日滝川市にある川の科学館で行いました)

profile

上田 英二 うえだ えいじ

1946年北海道滝川市生まれ。'70年3月慶應義塾大学商学部卒業、(株)上田コンクリート工業所入社。'87年5月同社社長就任。

真砂 徳子 まさご のりこ

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設。